

飯島賢二の『恐縮ですが・・・一言コラム』

第 195 回 植木等の「凄さ」～最後の芸人、安らかあれ！

2007.4.1

3月27日、小生の好きな芸人が、また一人亡くなった。「^{うえきひとし}植木等」である。彼の人となり、経歴等、改めて述べるまでもないが、「日本一の無責任男」として一世を風靡した、あまりにも偉大な喜劇役者、そしてミュージシャンであった。彼の凄さを垣間見てみる。

彼の母体とも言える「クレージーキャッツ」我国ジャズ界における最大にして最高のスターバンドである。メンバーは八ナ肇（ドラムス、工学院大卒）、植木等（ギター・ボーカル、東洋大卒）、谷啓（未だに我国最高のジャズトロンボーン奏者といわれている、中央大中退）、犬塚弘（ベース、文化学院卒）、安田伸（サクソ、東京芸大卒、N響の主席クラリネット奏者が敵わないと言った伝説あり）、石橋エータロー（ピアノ、東京音大卒、父は尺八界の大御所・福田蘭堂）、桜井センリ（ピアノ、早稲田大卒）...つまり、コメディアンである前に、そもそも超一流のジャズメンであることの「凄さ」が根底にある。この点、彼らの影響下にある「ドリフターズ」とは、音楽的資質が根本的に違う。

植木等の父・^{てつじょう}徹誠氏は、若いころキリスト教徒、後に改宗し浄土真宗大谷派常念寺の住職となる。有名な社会運動家（反差別・反戦の水平運動）であり、せがれの命名も「平等」にちなんで「等」と名づけた、本名である。少年時代の等は、治安維持法違反で投獄された父に代わり、僧衣を纏い檀家を回るといふ経験をしている。それでも^{ひる}怯まず社会運動を貫いた父の影響は、植木等の精神的「凄さ」の基盤となっている。

植木の演じる無責任男・平均（“たいらひとし”と読む）氏、勤勉実直な日本人の倫理観からは、不道德とされている“無責任、C調、^{らく}楽して儲ける”といった事を“責任もたない、関係ない”とあっさり肯定してしまった^{たいらひとし}平均のアナーキーさに、世のサラリーマン達は仰天した。そして、「そうだ、俺は、なんで、こんな小さな事にクヨクヨしていたんだ...」と、サラリーマン社会のしがらみに押しつぶされそうになっていたサラリーマン達は、力や権力をものともしない^{たいらひとし}平均の活躍に、喝采を贈った。そして、植木等自身、あの無責任男というキャラクターは、自分がもっとも嫌いとするタイプの間人であると、はっきりと語っているように、世間が求めているものと、自分がやりたい事のギャップに悩み続けた。植木の本性とは天と地ほどの違いであった^{たいらひとし}平均氏ゆえに、悩み、苦しみながら、最後までその役を演じ、貫き通した彼に、父^{てつじょう}徹誠の生き様を見ることができる。しかもその本心をおくびにも出さない「凄さ」は、並大抵ではない。

芸人・植木等とクレージーキャッツは、音楽をベースにした都会的でスマートな笑いと、社会風刺コントやサラリーマンコメディで人気を博した。下品で「芸」のかけらも見当たらない今の「笑い」に蔓延させられた現代人にとって、植木等の「芸」を知る余地がなくなったこと、不幸と言うしかあるまい。最後の芸人植木等、安らかあれ！...合掌...